

〔展評〕

・『中部日本新聞』 昭和三十二年五月二十日 〈岐阜版〉 (42)

美術

春陽・国画 名古屋 展をみて

針生 一郎



針生一郎 はりういちろう 一九二五—二〇一〇

美術評論家。仙台市生まれ。東北大学文学部卒業。東京大学美学科特別研究生(旧制の大学院制度)修了。花田清輝、野間宏らの「夜の会」、安部公房らの「世紀の会」、雑誌『世代』の同人。岡本太郎らの「アヴァンギャルド芸術研究会」に参加。美学会の創立に参加、『美学』の編集に携わる。『新日本文学』の編集委員、議長を歴任。『美術批評』誌への執筆が現代美術評論家の出発となる。ヴェネチア・ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレのコミッシヨナーをはじめ、アジア・アフリカ作家会議の委員を務める。晩年まで評論、講演活動を続けた。多摩美術大学教授、和光大学教授、岡山県立大学大学院教授を歴任。金津創作の森館長、原爆の図丸木美術館館長、美術評論家連盟会長を歴任した。

春陽・国画両展とも、わたしはすでに東京でみたのだが、名古屋の美術館でみると、ずいぶん印象がちがうのにおどろいた。作品にひとつひとつコクがあつて感覚に素直に語りかけてくる。上野の美術館にくらべると、壁面が清潔でゆったりしているせいもあるだろう。だからもしかすると、東京での何千点という作品をならべた公募展形式は、もう「鑑賞」の限界をこえているのかもしれないのだ。それだけに、こういう展覧会をどうそだてていくかは、美術家と市民と双方の課題だといつていい。

鑑賞の気やすさということは、裏を返せば、観衆と作品のあいだになれあいのフニキができやすいことだ。わたしは作品にコクがあると書いたが正直にいえば、少々コクのようなものがありすぎはしないか? よかれあしかれ、何千点の作品がけんめいに自己を主張している公募展の風景からみると、サロンのな空気ができ上つている。

国画会の地元作品では、岩田和子の「水門」が印象にのこつた。幻想的な構図のあつかいにも素朴な発見があるし、色調はやや甘い、それがかえつてういういしい感覚を感じさせる。杉井清二、細川雅子、野村正夫、鶴飼建二ら、感覚の意識的なくみたてのうちに生活心理を表現しようとする作品が目立つたが、しっとりとした色調のかもしれないですフニキのようなものが画面をもうひとつふつきれないものにしてはいるなかでは、神谷絹子の「のぼりがま」がつよい構成とヘイの赤とで、調和のとれた表現をみせていた。

抽象的なしごとでは、吉兼三丸の「作品」が、生物の断片や物体がくずれおちるような奇妙な構図で、現代のある感触を表現している。ただ白い

面がのっぺりと無表情で、意欲が空転しているようだ。櫛田勇の「都会裏」も画面いっぱい白い絵具をたたきつけているが、もう少しマチエール(画面の肌)に神経を使つてほしい。

国画会では、須田剋太、川口軌外など、抽象系の年季の入った作家が新しい動きをみせており、東貞美、野田好子、渡辺貞一、鎌田雛子など、期待のもてる新人層がようやくあらわれてきた。歴史の古い団体だけに、つみ重ねられた技術の重荷を、たえずつきやぶっていく気迫が必要だ。杉本健吉の「マスク」はこの作家の停滞しない意欲を語っているが、色のあつかいが趣味的なのが気になる。

春陽会の方は、若い世代にいつそう活発な空気が感じられ、探求のコースも一様ではない。出岡実の「網にかかった魚」など三点は、物と空気の流れあいを抽象化された画面にとりこめており、まだ安定していないが、それだけに未知の可能性をさぐりだせるかもしれない。「小鳥の静物」の方はやや平板で、レイアウトのような効果になっている。徳田信保や須田敏夫は、風景に心情をたくして、逆に対象を分解しようとしているようだ。この会では藤井令太郎の椅子と椅子との対話にならったわけでもあるまいが、ドライな物体のうちに心理的なドラマをうかび上げようとする作品が眼についた。山内賢一、西尾健、上田健一などここでも描写的な技術のカラーがやぶられておらず、意味ありげな表情だけが目立つことになる。

日本の画家は、一般に「事」を描いて「物」を描かない、といわれている。春陽、国画でも具象と抽象を問わず、作画の根底にある意識は、きわめてウェットなのだ。その生活に根をおろした姿勢が、体質的なものの成

熟をもたらしている反面、感覚の底の浅さとなってあらわれている。岡鹿之助、中谷泰、倉田三郎といった作家は、さりげない感覚をとおしてこういう風土に抵抗しているのではないか。わたしはかれらの作品に、なまぬるい情感を拒否した観照のきびしさを感ぜずにはいられない。

鶉居町子と荒川久仁子の静物は色も定着していないし、写実的な部分と原色な部分がチグハグだがそこに特異な幻想がうがびでているのをおもしろく思った。新しいものにひかれる傾向と、古い心情になずみがちの部分とがからみあって、そこから奇妙にぶきみなものが生れている。

最後に、少々苦言を呈したい。両会とも地元在住の会員たちは、二、三の例外をのぞけば、大半が安定した画境にとじこもって足ふみしているようだ。むしろ若い出品者の方が、技術は未熟でもナマ身で時代の呼吸をうけとめている。むしろ、流行に気がねする必要はゴウもないが、もう少し自己を固定させない思考の振幅がほしい。

それから国展工芸部では、伝統趣味や民俗調にあまりに無造作によりかかった作品が多かった。わたしのいいたいのは、もつと近代調をとりいれよ、といったバカげたことをいいたいのではない。これは同会の写真部にみられる類型的なモダニズムと、同じものではないか。ともあれ、個人的な発言を、われわれの生活と美意識の変革について、工芸家や写真家こそもつと敏感であつてほしいのだ。

(美術評論家)

*「春陽・国画連合展」 昭和三十二年五月十七日〜二十八日

愛知県美術館